CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

胎土分析からみた備前焼と備前焼類似品

白　石　　純

―論　文　要　旨―

備前焼の考古学的研究が進み，備前焼に酷似した製品が西日本各地で焼かれていることが明らかになってきた。時期的には，14世紀から19世紀にかけてで，生産は短期間で生産が終わるものが多く，生産地域も山口県，兵庫県，大阪府，京都府，石川県などである。

本研究では，これら各地域で焼かれている備前系陶器と本家本元の備前焼が自然科学的な胎土分析により，胎土に違いがあるのかどうか検討した。その結果，各地で生産されている備前系陶器とは胎土が異なることがわかった。そして，これらの分析結果をもとに，兵庫県豊岡市豊岡城，出石城出土の備前焼と新潟県佐渡市佐渡奉行所跡出土の備前焼がどの生産地で焼かれたものか推定を実施した。すると，各遺跡には，本家本元の備前焼と各地で生産された備前系陶器の両方が入っていることが推定された。

キーワード：備前焼，備前焼類似品，胎土分析，生産地推定

１．はじめに

1980年代の終わりごろから備前市以外の関西でも近世備前焼類似品（擂鉢）が焼かれていることが考古学的研究で確認された[1]。また第１図に示しているように関西（堺・堂島・明石）以外でも時期は異なるが西は山口市動物愛護センター窯[2]，東は石川県加賀市作見窯[3]が確認されている。また，最近の調査で京都府舞鶴市安久窯，兵庫県豊岡市山本窯[4]，丹波市大部谷窯・村森窯[5]でも桃山期の備前系陶器が焼かれていることが判明した。

この報告では，自然科学的な胎土分析により各地で焼かれている備前系陶器の胎土が本家本元の備前焼と胎土的に差異がみられるかどうか検討した。

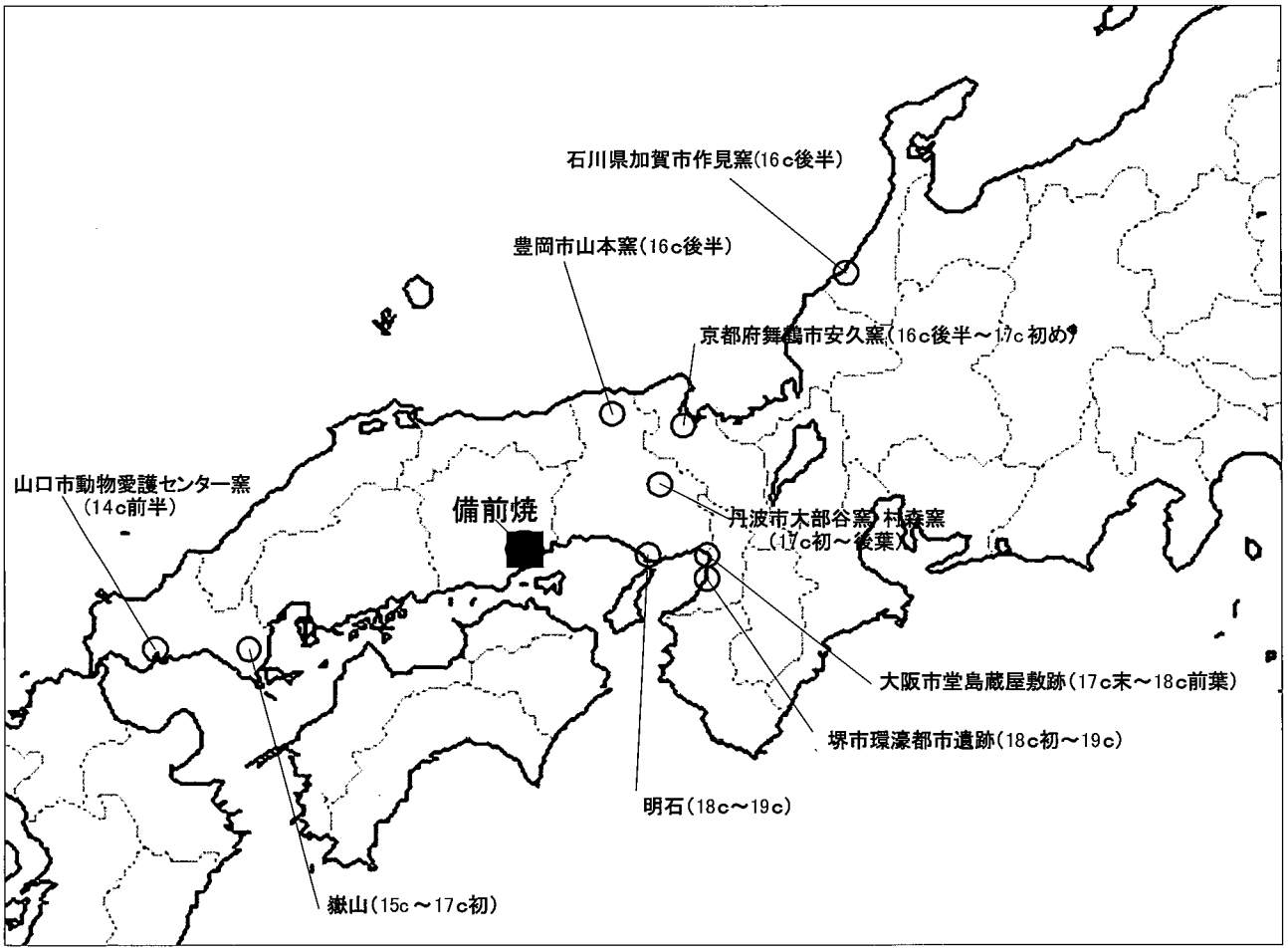
２．分析結果

14世紀から19世紀にかけて，西日本各地で備前系陶器が焼かれていたことが考古学的に判ってきている。この分析では14世紀段階，16世紀～17世紀段階，17世紀末～19世紀段階の時期別に分けて[6]分析結果を報告する。

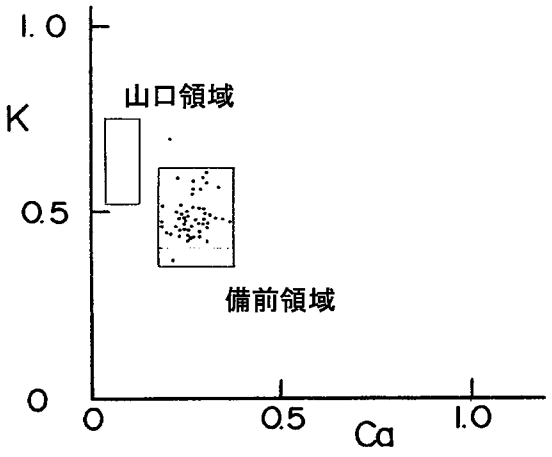
（１）14世紀段階の備前系陶器の産地比較

この段階の地方で焼かれた例としては，山口動物愛護センター窯が唯一の事例である。

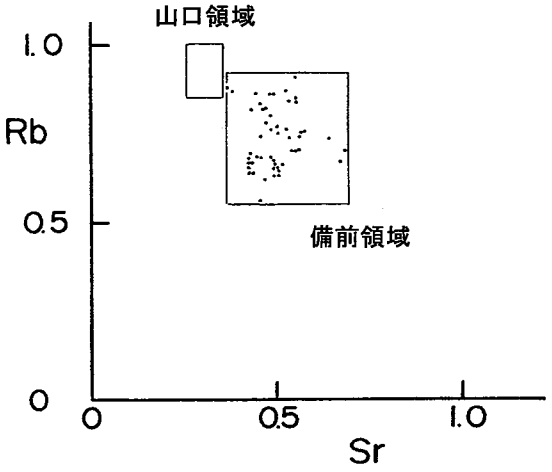
胎土分析は，三辻利一氏により分析が行われている[7]。分析結果をみると，第２図K-Ca，第３図Rb-Srの両分布図とも山口動物愛護センター窯と備前焼が明瞭に識別できている。



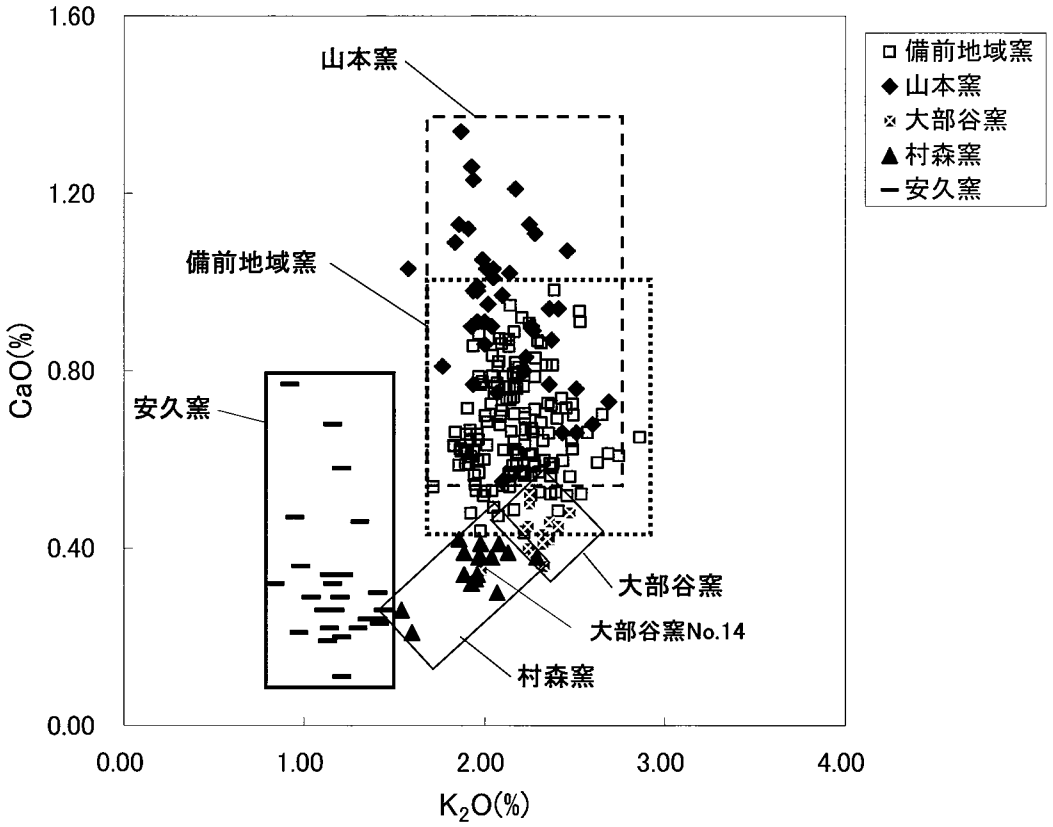
第１図　各地の無釉焼締陶器窯（備前焼系窯）の分布図



第２図　K-Ca 散布図（註７より一部改変）



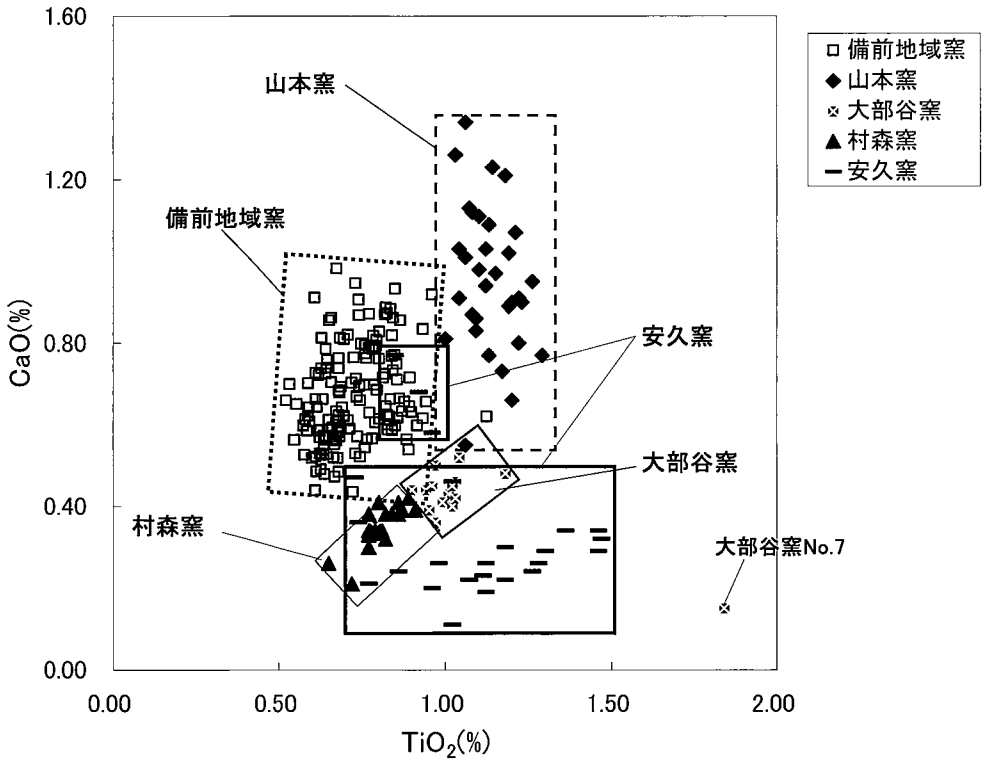
第３図　Rb-Sr 散布図（註７より一部改変）



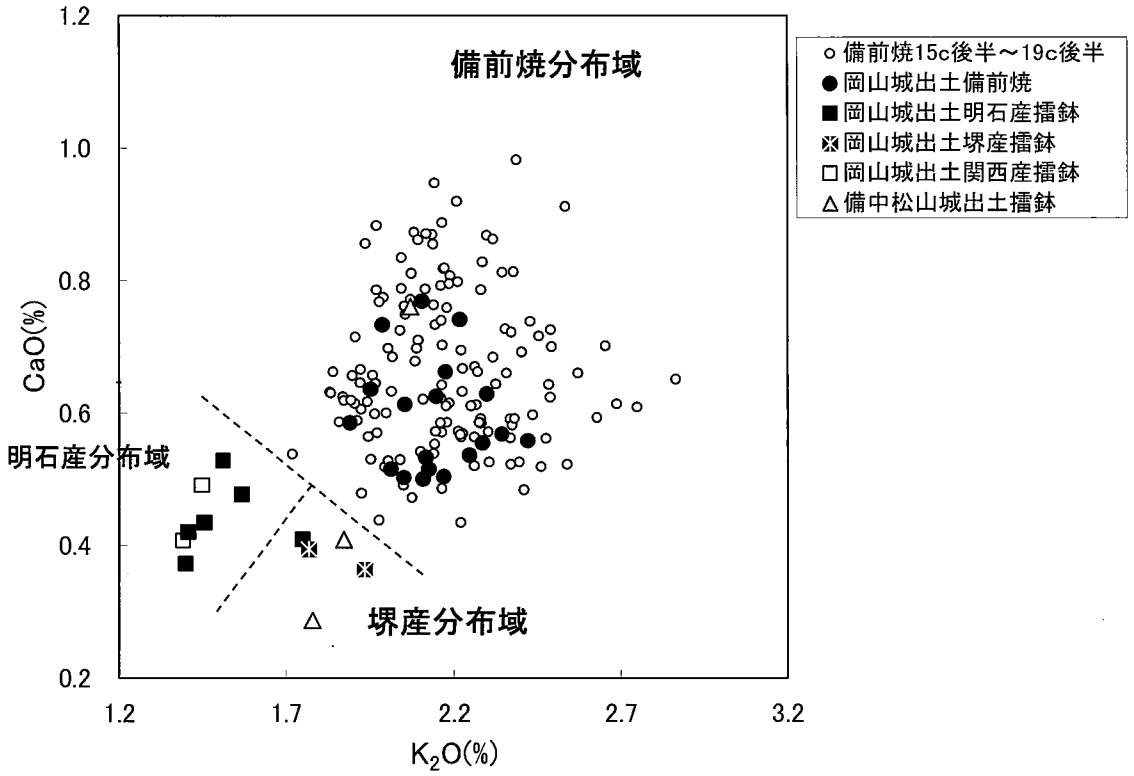
第４図　京都府・兵庫県内窯跡と備前焼窯の比較

（２）16世紀～17世紀段階の備前系陶器の産地比較

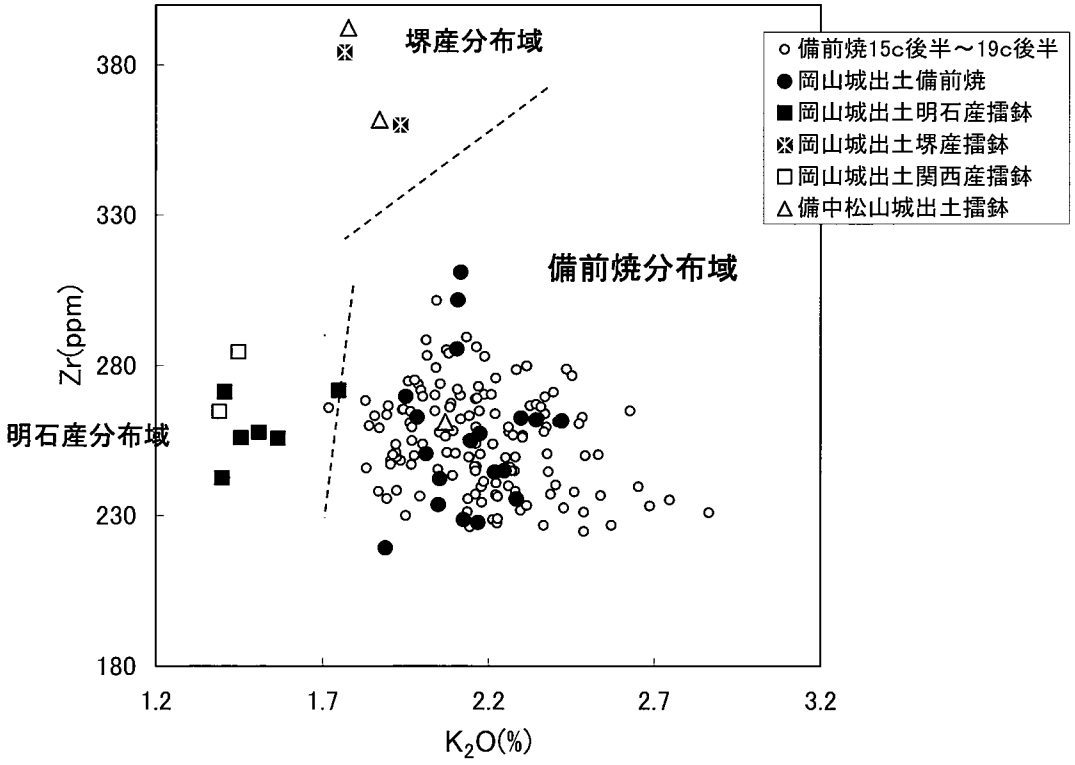
この段階の各産地の操業時期は16世紀末～17世紀前葉が中心となるようである[8]。各産地は加賀の作見窯（石川県加賀市作見），丹後の安久窯（京都府舞鶴市安久），但馬の山本窯（兵庫県豊岡市山本），丹波の大部谷窯（兵庫県丹波市柏原町下小倉），村森窯（兵庫県丹波市山南町村森），周防の嶽ヶ山周辺が現在まで判明している窯跡である。なお，周防の嶽ヶ山周辺は「嶽山壷」と呼ばれる備前焼系陶器の分布から生産地としての可能性がある陶器である[9]。



第５図　京都府・兵庫県内窯跡と備前焼窯の比較



第６図　関西産と備前焼窯の比較



第７図　関西産と備前焼窯の比較

胎土分析では，但馬の山本窯，丹波の大部谷窯，村森窯，丹後の安久窯について分析を実施し，次のような結果が得られた。まず第４図K_2O-CaO，第５図TiO_2-CaOの散布図では，生産地である伊部地域の備前焼窯，山本窯，大部谷窯，村森窯，安久窯の各窯跡出土試料の比較を行った。

第４図ではCaO量の違いで山本窯，大部谷窯，伊部地域の備前焼窯（以下備前焼窯と呼ぶ）はそれぞれ分布領域が半分ほど重なるが，村森窯はCaO量が0.4%以下に分布し他の窯と判別が可能である。また，安久窯はK_2O量が他の窯より少なく識別できる。

第５図では，安久窯，山本窯，大部谷窯，村森窯，備前焼窯の各窯がTiO_2量およびCaO量の違いで，ほぼ明瞭に判別が可能であった。つまり，TiO_2量が約1.0%付近を境界として，それより多い領域に山本窯が，逆に少ない領域に備前焼窯が分布し，CaO量が約0.5%より少ないところに大部谷窯，村森窯，安久窯が分布している。また大部谷窯と村森窯はTiO_2量が約1.0%付近でCaO量が約0.4%付近を境界として，それより多いところに大部谷窯が，少ないところに村森窯の試料がそれぞれ分布した。

（３）17世紀末～19世紀段階の備前系陶器の産地比較

この段階の各産地は，大阪堂島窯（大阪市福島区福島一丁目），堺環濠都市（大阪府堺市）・明石（兵庫県明石市魚住周辺），虫明窯（岡山県瀬戸内市邑久町虫明）・法曽窯（岡山県新見市法曽）・木之庄窯（広島県福山市木之庄）・鞆の梅谷皿山窯（広島県福山市鞆町）の各窯跡が知られている[10]。このうち虫明窯，法曽窯，木之庄窯，鞆の梅谷皿山窯は人形徳利を主体に模倣している窯跡である[10]。

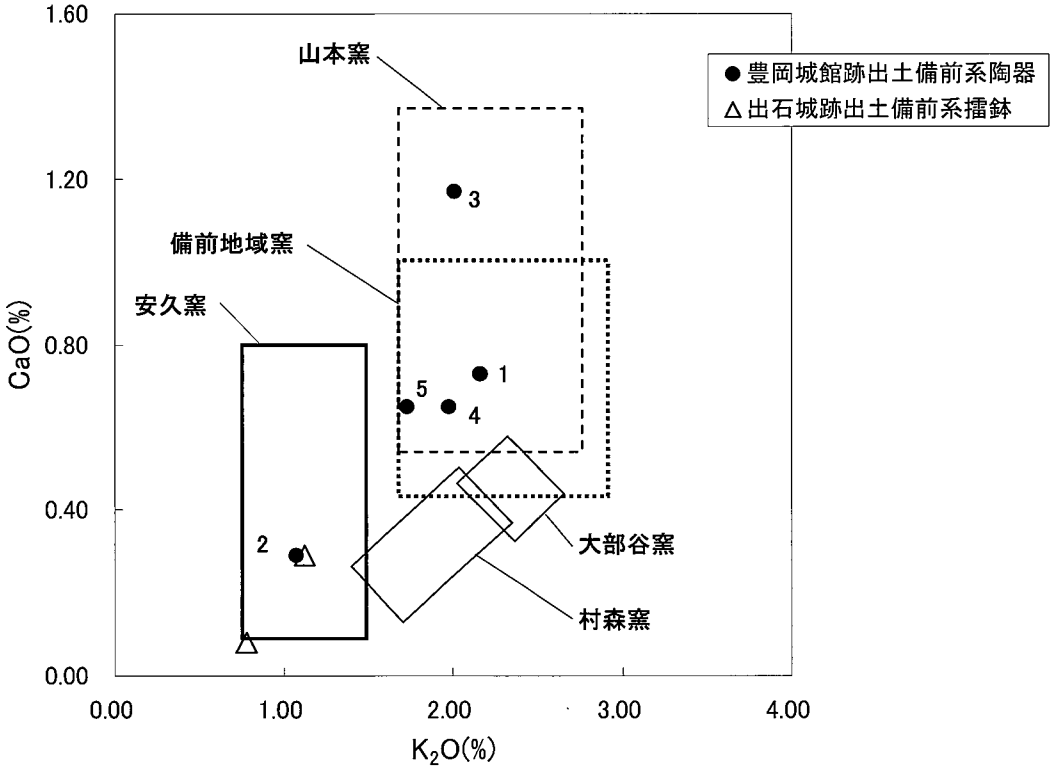
胎土分析では，堺環濠都市・明石の関西地域で焼かれた擂鉢と備前焼の胎土比較を行った。

その結果，第６図K_2O-CaO，第７図K_2O-Zrの両散布図から関西産擂鉢は備前焼と胎土が異なっていることが推定された。

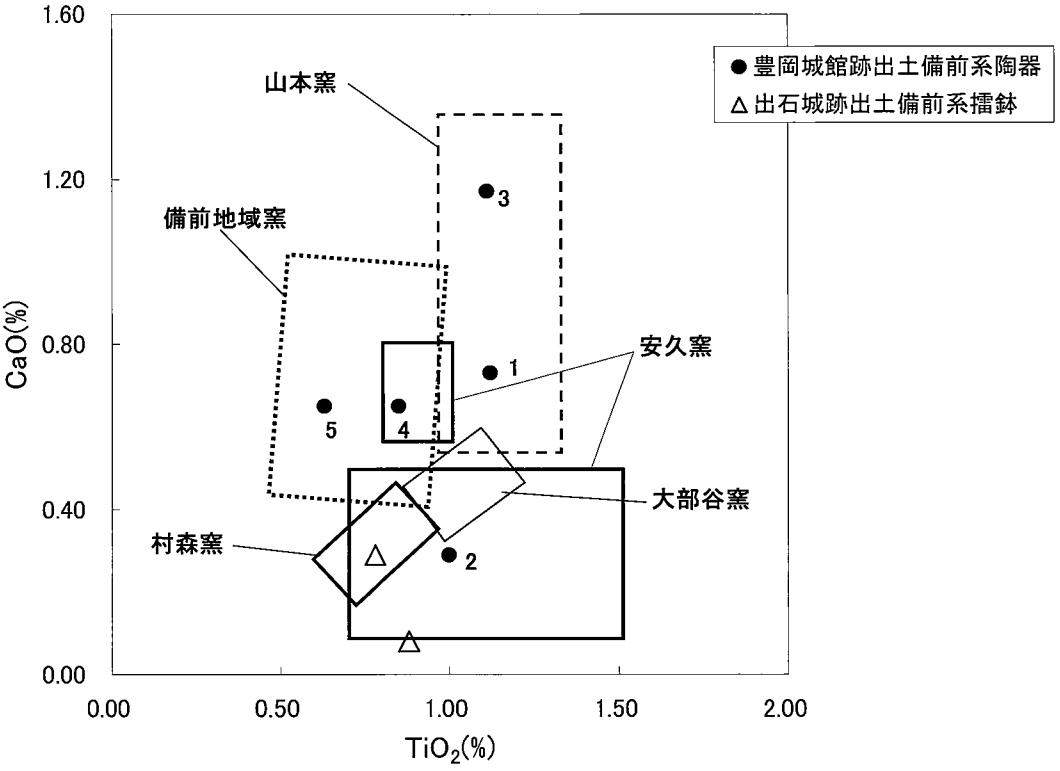
（４）兵庫県出石城および豊岡城館出土の備前焼陶器の産地について

第８図K_2O-CaO，第９図TiO_2-CaOの散布図では，出石城跡と豊岡城館跡から出土した備前焼系陶器（擂鉢と茶道具）がどこの生産地から持ち込まれたのか推定をした。その結果，第８図では，出石城跡の試料番号１・２（擂鉢）と豊岡城館跡２（擂鉢）が安久窯跡領域に，豊岡城館３（擂鉢）が山本窯跡領域に，豊岡城館跡１（擂鉢）・４（擂鉢）・５（茶道具）が山本窯跡と備前焼窯跡が重複する領域に分布した。

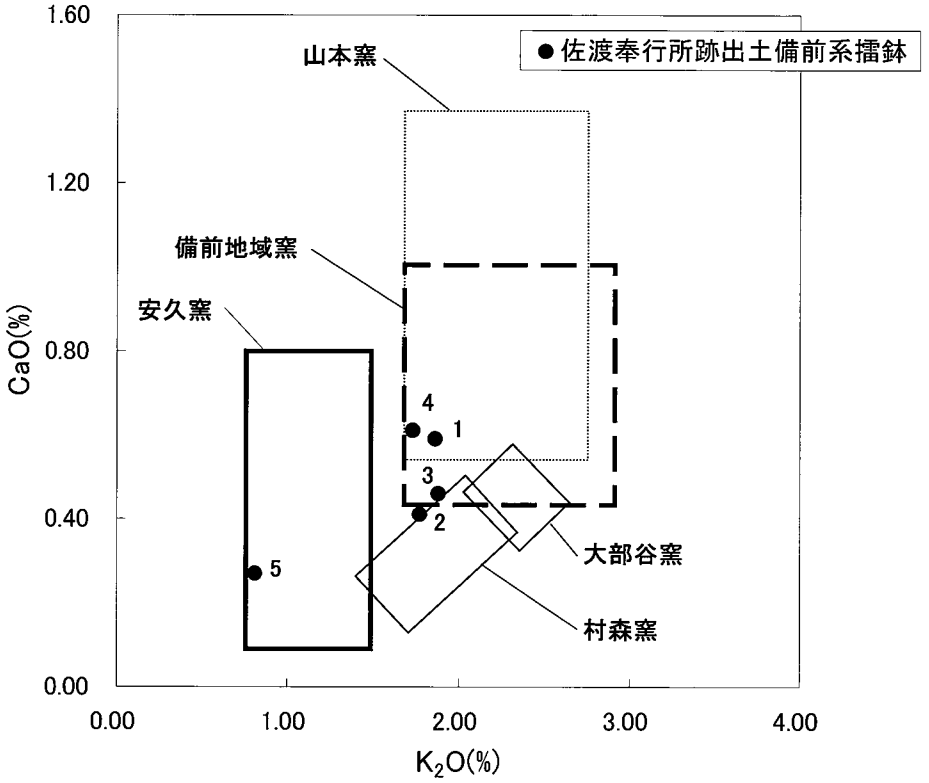
第９図では，出石城跡の試料番号１・２（擂鉢）と豊岡城館跡２（擂鉢）が安久窯跡領域に，豊岡城館跡１・



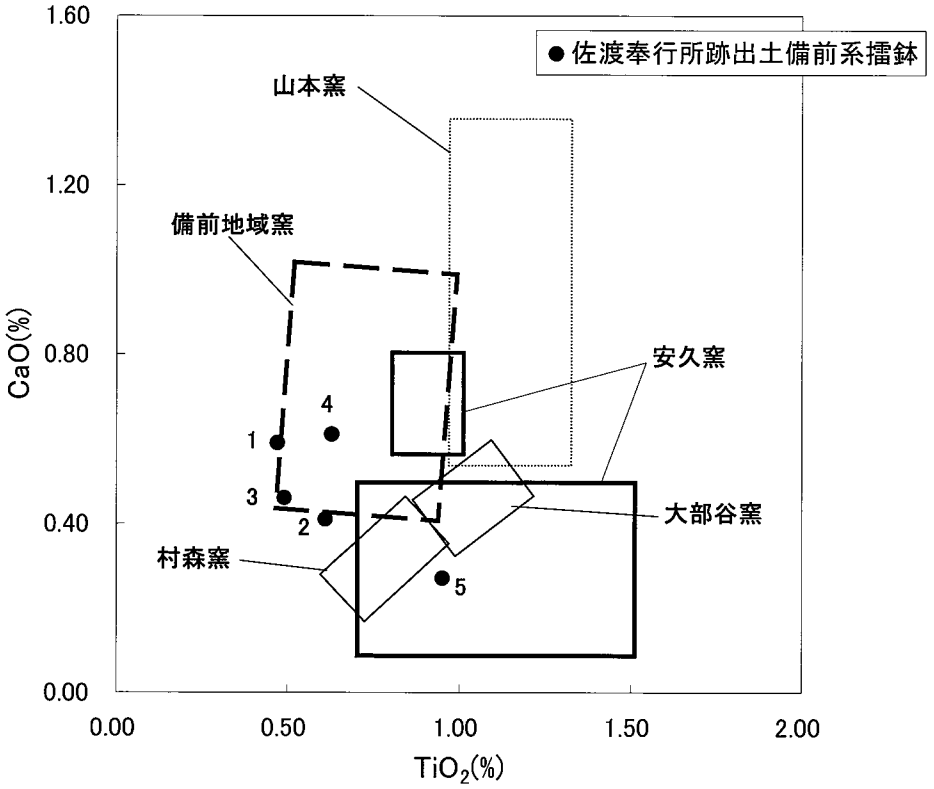
第８図　出石城，豊岡城館出土備前系陶器の産地推定



第９図　出石城，豊岡城館出土備前系陶器の産地推定



第 10 図　佐渡奉行所跡出土備前系陶器の産地推定



第 11 図　佐渡奉行所跡出土備前系陶器の産地推定

３が山本窯跡領域に，豊岡城館跡４・５が備前焼窯跡領域に分布した。

以上の分析結果から，出石城跡１・２（擂鉢）と豊岡城館跡２（擂鉢）は安久窯に，豊岡城館跡１・３は山本窯，４・５が備前焼窯にそれぞれ推定された。

（５）新潟県佐渡奉行所跡出土の備前系陶器の産地について

第10図K_2O-CaO，第11図TiO_2-CaOの散布図で検討した。その結果，第10図では１～４（第４図１～４）までの擂鉢が備前および山本窯が重複する領域に，５（第４図５）の擂鉢は安久窯の領域に分布した。第11図では，１～４までの擂鉢が備前焼窯跡の領域に，５の擂鉢は安久窯の領域に分布した。

以上のように佐渡奉行所跡出土陶器の擂鉢５点の生産地推定を実施したところ，１～４までの擂鉢は備前窯に，５の擂鉢は，安久窯に推定された。このように，佐渡奉行所跡出土の陶器擂鉢には複数の生産地から搬入されていることが推定された。

３．おわりに

西日本地方の14世紀から19世紀にかけての備前焼系陶器の胎土分析を実施したところ各生産地とも本家本元の備前焼と胎土が異なることが判明した。以下各地域や時期別に分けて整理する。

（１）14世紀段階では，現在までのところ山口動物愛護センター窯のみで備前系陶器が焼かれていることが判っており，胎土分析が三辻利一氏により実施されている。その結果，K，Ca，Rb，Srの各元素で違いがみられ，備前焼と胎土が異なっていることが推定されている。

（２）16世紀～17世紀段階では安久窯，山本窯，大部谷窯，村森窯の備前焼系陶器と備前焼窯との比較でも胎土的に識別が可能であった。つまりK_2O，CaO，TiO_2の各成分量が安久窯，山本窯，大部谷窯，村森窯，備前焼窯のあいだで違いがみられ，散布図で識別が可能であった。

（３）17世紀末～19世紀段階の備前系陶器の産地比較では，関西産（堺・明石）と備前焼のあいだでも胎土的に識別が可能であった。つまりK_2O，CaO，Zrの各成分量で堺，明石，備前焼の各産地に胎土が識別できた。

このように現在までに判明している各地の備前系陶器窯を備前焼と比較したところ，すべての窯で胎土的に識別が可能であった。そして，いくつかの消費地遺跡から出土した擂鉢の産地推定を試みた。まず，出石城，豊岡城館跡から出土した擂鉢では，複数の産地（備前，山本，安久）から供給されていることが推定された。また，新潟県佐渡奉行所跡から出土した擂鉢でも，備前と安久の複数産地から供給されていることが推定できた。

このように，今回の産地推定では，消費地遺跡に複数の産地から供給されていることが推測された。

この分析では以下の方々や機関に，ご教示および分析試料の提供を受けた。末筆ではありますが記して感謝いたします（敬称略）。

石井　啓，伊藤　晃，岩崎　仁志，潮崎　誠，徳原多喜雄，乗岡　実，長谷川　眞，松岡　千寿，岡山市教育委員会，丹波市教育委員会，新潟県佐渡教育委員会，豊岡市教育委員会，備前市教育委員会

【註】

（１）白神典之　1988「堺擂鉢について」『堺環濠都市遺跡（SKT79）発掘調査報告』堺市文化財調査報告第37集

森村健一　1988「堺環濠都市遺跡出土の近世陶磁器」『考古学ジャーナル』No.297

堀内秀樹　1992「『備前系焼締め擂鉢』の系譜」『東京考古』10

嶋谷和彦　1996「堺擂鉢の生産と流通」『考古学ジャーナル』No.409

乗岡　実　2000「近世の備前焼擂鉢とその類似品」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1998（平成10年度）

長佐古真也　2000「近世焼締め擂鉢の生産地同定」『東京都埋蔵文化財センター　研究論集』Ⅻ

（２）岩崎仁志　2000「防長地域の中世陶器窯」『陶塤』山口県埋蔵文化財センター年報　第13号

岩崎仁志　2007「山口県における備前系陶器」『備前と茶陶－16･17世紀の変革－』備前市歴史民俗資料館紀要９

（３）伊藤　晃　2002「加賀作見窯と備前焼Ⅴ期との関係」『田辺昭三先生古稀記念論文集』

伊藤　晃　2007「加賀作見窯と備前焼Ⅴ期との関係」『備前と茶陶－16･17世紀の変革－』備前市歴史民俗資料館紀要９

（４）兵庫県豊岡市教育委員会の潮崎誠氏からご教示いただいた。

潮崎　誠　2007「豊岡市山本窯跡」『備前と茶陶－16･17世紀の変革－』備前市歴史民俗資料館紀要９

（５）長谷川　眞　2005「丹波焼における中核窯と周辺窯」『兵庫陶芸美術館研究紀要』第１号

長谷川　眞　2006「近世丹波焼の諸相」『江戸時代のやきもの－生産と流通－』

長谷川　眞　2007「丹波窯にみられる備前系技術－16･17世紀を中心に－」『備前と茶陶－16･17世紀の変革－』備前市歴史民俗資料館紀要９

備前市教育委員会　2003「伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ」備前市埋蔵文化財報告５

（６）乗岡実氏により各段階に分けて，各地で生産された備前系陶器の整理分離が行われている。この胎土分析でも乗岡氏の分類に従い，胎土分析の差異を検討した。

乗岡　実　2000「近世の備前焼擂鉢とその類似品」『岡山市

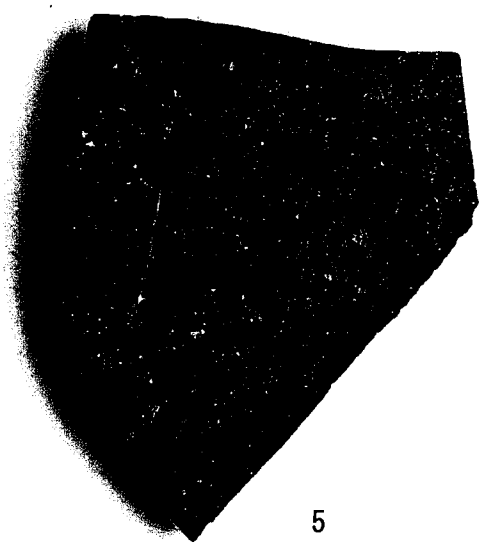
埋蔵文化財調査の概要』1998（平成10年度）
乗岡　実　2007「各地で作られた備前焼に似た焼き物－問題の整理と展望－」『備前と茶陶－16･17世紀の変革－』備前市歴史民俗資料館紀要９

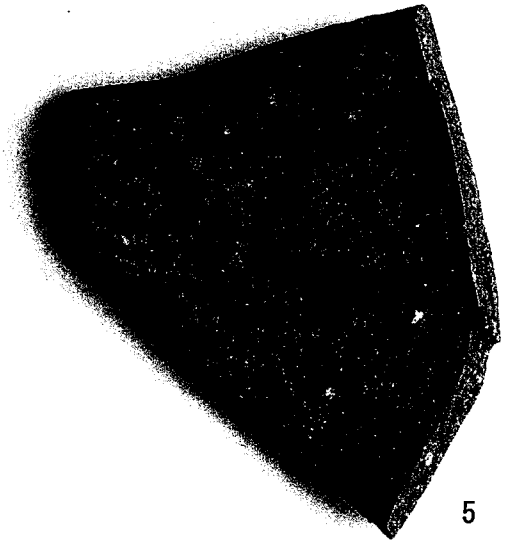
（７）三辻利一　2004「山口備前系陶器と備前陶器の相互識別」『山口市埋蔵文化財年報』３　山口市教育委員会

（８）註（６）

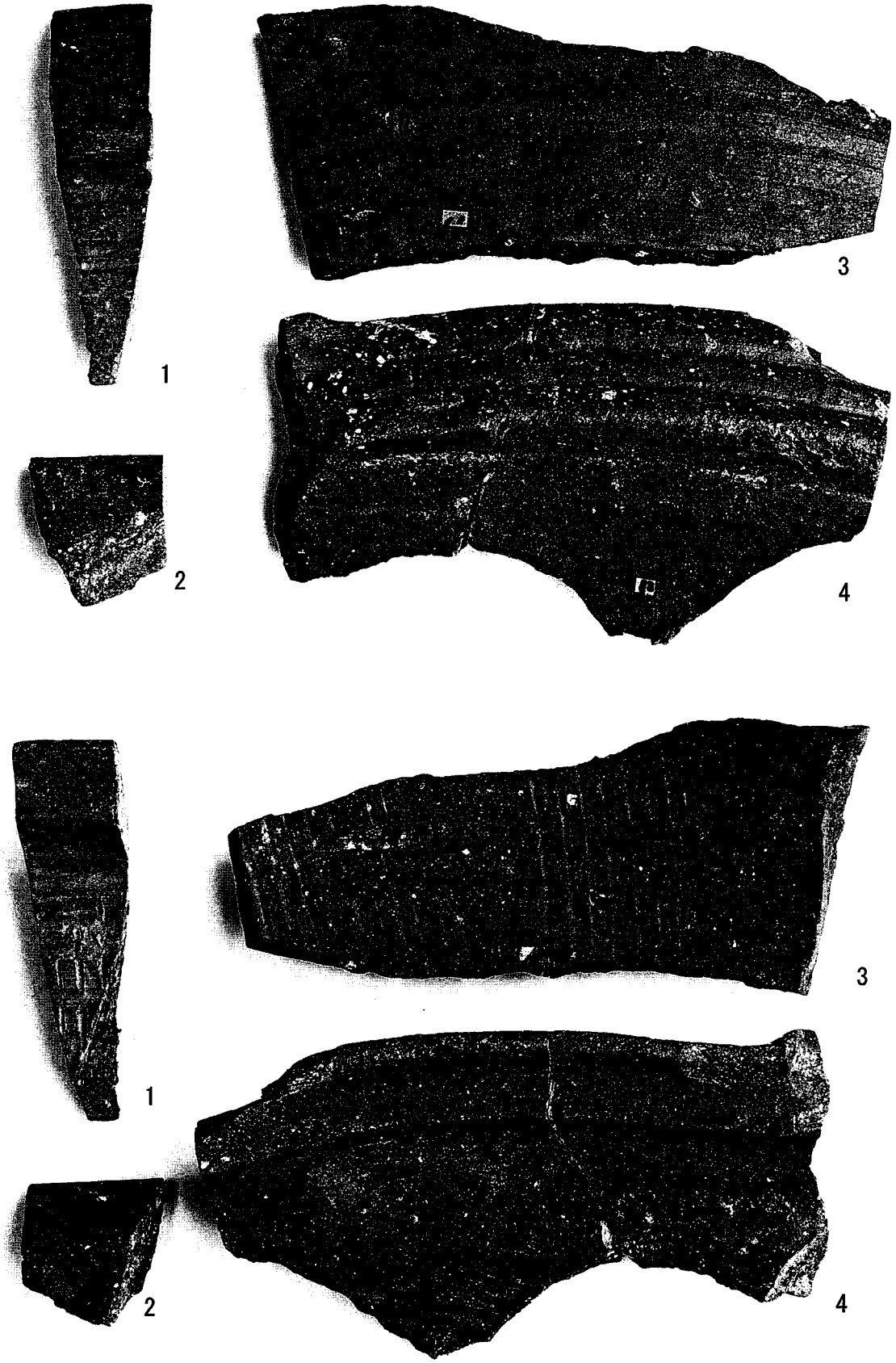
（９）岩崎仁志　2007「山口県における備前系陶器」『備前と茶陶－16･17世紀の変革－』備前市歴史民俗資料館紀要９
乗岡　実　2007「各地で作られた備前焼に似た焼き物－問題の整理と展望－」『備前と茶陶－16･17世紀の変革－』備前市歴史民俗資料館紀要９

(10) 註（６）

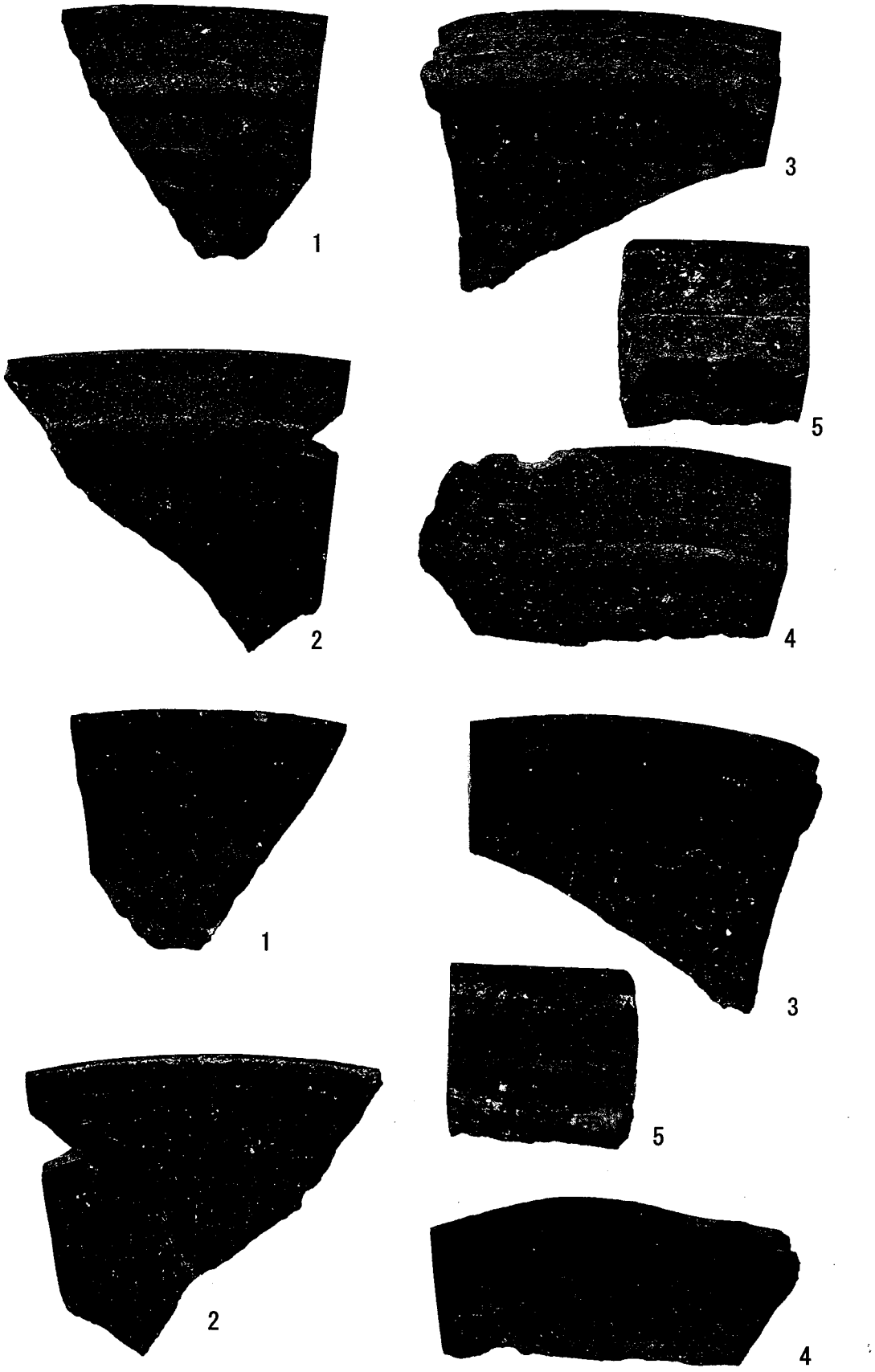




第 12 図　兵庫県豊岡城館跡出土備前焼系陶器茶道具（右：外面，左：内面）



第 13 図　兵庫県豊岡城館跡出土備前焼系陶器擂鉢（上：外面，下：内面）



第 14 図　新潟県佐渡奉行所跡出土備前焼系陶器擂鉢（上：外面，下：内面）